



No. 102 2011. 4

(株) よかネット

もくじ

NETWORK

- 地域資源を活用した内発的な産業育成を考える
—「着地型観光」の夢と現実— 2
- 260 数年続く水路組合と 4.2km の水路によって維持され続ける
大中尾の棚田景観～大中尾棚田保全組合の取り組み～ 5
- そこには暖かな心の“日だまり”があるようだった
～ NPO たすけあい遠州の「もうひとつの家」の取り組み～ 8

見・聞・食

- 「ド・ロさまそうめん」事業は、今も引き継がれ、
ド・ロ神父の味を守りつづけている 11
- 蔵の中に商店街がつめこまれた「ありえ蔵巡り」視察 14
- ポイントカードで勉学意欲を高める静岡科学館「る・く・る」 16
- 地域の祭りのすごさをみた「高千穂夜神楽見学」 18

近況

- 雪の永平寺 20
- ノリシロ 21
- よかネットキムチプロジェクト進行中！ 23

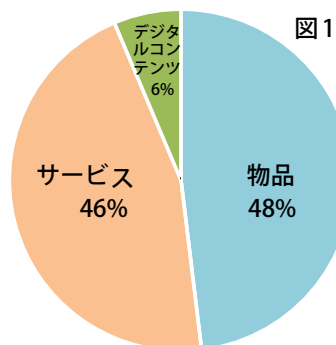
表紙解説

お知らせ

- 第 19 回 よかネットパーティーのご案内 26
- ふくつの鯛茶づけフェア開催予定 26

●インターネット・通販売上は約 3.1 兆円、コンビニ売り上げの 4 割に

年間売上高 3,148,722 百万円

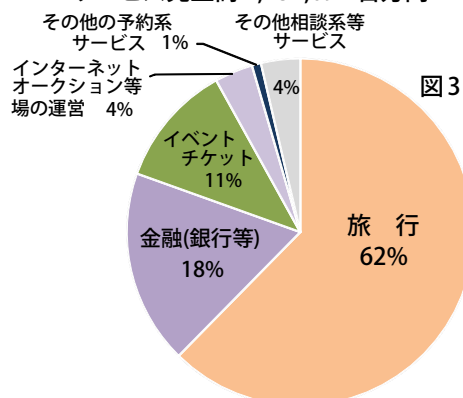


最近、中山間地域や過疎地域の新たな所得獲得を狙って、地域産品の販路を拡大するため、インターネットによる販売への取り組みが増えています。全国のインターネットを活用した販売をみると、平成 21 年電子商取引調査結果では、売上は約 3.1 兆円、うち物品は 48%（約 1.5 兆円）サービス 46%（1.4 兆円）となっています。21 年のコンビニ売り上げ（JFA 会員）7.9 兆円に対して 4 割に達しています。（25 頁へ続く）

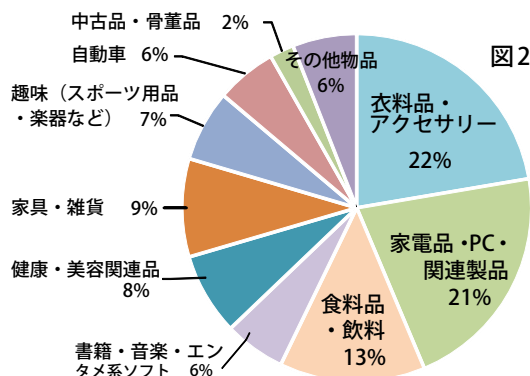
資料：平成 21 年「消費者向け電子商取引実態調査」の取扱品目別売り上げより作成

注：電子商取引定義は、一部でもコンピュータを介したネットワーク上で受発注が行われることとされています

サービス売上高 1,434,094 百万円



物品売上高 1,513,830 百万円



地域資源を活用した内発的な産業育成を考える —「着地型観光」の夢と現実—

原 啓介

●着地側が商品企画・提案を行う「着地型観光」

近年、地域にあるヒト・モノ・サービス等を組み合わせ、内発的な産業を育成することが求められている。なかでも最近では観光を産業振興の重要な施策の一つに位置づける自治体も多く「着地型観光」というキーワードをよく耳にする。今回は、このテーマについて考えてみたい。

以前の観光は、発地側の旅行会社が企画・販売する旅行に個人、団体で参加するスタイルが主流であった。しかし、情報化の進展により、インターネットで自ら宿泊先や交通手段を予約し、個人や小グループで旅をする観光客が増加している。また、個人のニーズが多様化する中で、観光客が求める「深さ」を発地側の旅行会社が企画し、準備することが難しくなっている。そのような中で、旅先の着地側の旅館や物販・飲食といった観光事業者に加え、様々な分野の事業者や地域住民が来訪者のもてなしに参画し、地域の資源を活かした地元ならではの商品・サービスを開発提供するスキームが各地で展開されている。

九州でも、別府市の「ハットウ・オンパク」や、長崎市の「さるく博」を初めとして、様々な企業・団体・自治体が上記のような「着地型観光」の商品づくりに取り組んでいる。



山都町でのワークショップは4回開催。

●よかネットでも、着地型観光の商品づくりに取り組んでいます

平成22年度、当社では2件の着地型観光の商品開発を行う業務に取り組んだ。一つは熊本県からの委託を受け、社団法人山都町観光協会との新たな取り組みとして着地型の観光商品開発のお手伝い、二つめは国交省の委託による佐賀県佐賀市富士町における地域資源を活用したコミュニティビジネスの実現可能性調査である。

観光客の多様なニーズを満たす商品を準備するためには、地域内の幅広い人材の連携と、地域資源を編集・加工して商品化、来訪者をもてなすといった一連の業務サービスを地域内で行うことが必要である。そのためには、事業に関わる方々の知恵やアイデアを結集し、理解や共働を得ながら、事業を進めていく必要がある。

そこで、これら二つの事業においては、ワークショップによる資源の掘り起こしとツアー商品の案づくりを行い、それらの案について旅行会社やまち歩きのアドバイザー等、プロの目による磨き上げを行った。その後、商品毎に設定したターゲット層と合致する方々を実際にお招きして、課題を把握し、改善につなげるというプロセスを踏んだ。山都町においては29本のツアー案を作成し、うち1本を試行、富士町に



富士町でのモニターツアーは、当初想定した30名の募集が1日で完売。

においては 26 本のツアー案を作成し、11 回試行した。手前味噌ではあるが、いずれも来訪者の満足度は 9 割を超える評価を得た。

●着地型観光にはコーディネーターが必要だが、経営的には厳しい

着地型観光を持続的に展開していくためには、着地側にてもてなしを行う住民や事業者の連絡調整の他、地域内の着地型旅行商品の提供者と市場（旅行会社、旅行者）をつなぐワンストップ窓口としての機能を担う体制があることが望ましい。こうした事業体のことを、観光庁は「観光地域づくりプラットフォーム」と呼んでいる（下図参照）。また、このプラットフォームの運営については、事務局・コーディネーターが必要であるが、この役割は観光協会や株式会社、NPO、行政等、地域によって様々な主体が担っている。

このプラットフォーム内における売上げの分配について、ある旅行会社の方からお聞きしたところ、一般的な収入の分配は、地元事業者・町民側が 8 割、コーディネーターが 1 割、旅行会社が 1 割程度だそうだ。ということは、例えば 5000 円の観光商品におけるコーディネーターの収入は 500 円であり、これを毎週、年間 50 回実施したとして、毎回 20 名が参加した場合の収入は年間 50 万円にすぎない。コーディネーターが第三種旅行業の登録を行うと、利益率は 2 割となり収益は増加するが、一方で地域外への情報発信力は失われる。地域内の利害関係を調整し、営業を行うコーディネーターの存在が大変重要である一方で、コーディネート事業が

独立採算となることは容易なことではない。九州の多くの着地型観光の取り組みをみても、赤字事業であり、行政の補助金等で補填されているというケースが多々見受けられる。

●コーディネート事業の成功事例は、南信州観光公社

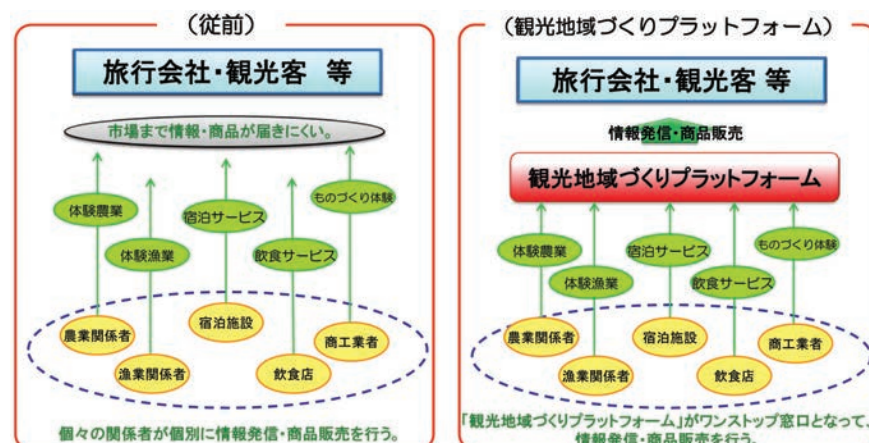
この着地型観光のコーディネート事業で成功しているのが、長野県飯田市にある（株）南信州観光公社である。出資者は飯田市をはじめとした近隣の 14 市町村の他、J A、交通事業者、新聞社等、周辺地域の中核企業が名を連ねる。

昨年 9 月、同社の高橋社長を富士町にお呼びし、お話を伺った。以下は、その概要である。

飯田市は人口約 10 万 7000 人の地方都市である。1996 年度より中高校生を対象とした修学旅行、総合学習プログラム（体験教育旅行）に取り組んでいる。当時は市の商業観光課が受入に関する事務局業務を行っていたが、農業体験の受入が増えてきたことに伴って 2001 年に第三セクター形態の「（株）南信州観光公社」を設立した。

○約 500 軒の農家をコーディネートし、中学生に「農村の普段の暮らしを」を提供

「人との交流」をキーワードに 200 種類以上の体験プログラムを準備し、体験プログラムの指導は農家をはじめとする住民が担っている。販売は旅行会社が行い、南信州観光公社が受け入れ農家のコーディネートを行っている。農家民泊において学生に提供される体験メニューは、農作業の他、料理や工芸、加工などの農村生活である。



「観光地域づくりプラットフォームの必要性」観光庁HPより

<http://www.mlit.go.jp/common/000126599.pdf>

○ 200 以上の商品ラインナップを持つが、農家生活・農業体験が売上げの8～9割

南信州観光公社では、これまで 200 本以上の観光商品を企画し、多様なニーズに応える努力をしているが、個人観光客は売上の 1～2 割であり、その大部分を占めるのが教育旅行（農業体験）である。教育旅行が年間の売上げの 8～9 割を占めており、年間約 1 万人の中学生が農家民泊を体験している。個人観光客向け商品の観光公社としての売上げは、一人あたり 200～500 円であるのに対して、教育旅行は一人あたり 1600 円になる。加えて、一度に受け入れる旅行者数も 100～200 名と多い。

受け入れ農家数は体験教育旅行の希望者の増加に伴って長野県南部地域一帯に拡大し、現在では市内外で約 500 軒となっている。

設立 4 年目以降単年度黒字を計上し、2009 年度の売上は 1 億 5 千万円。現在スタッフ 7 名（うち飯田市からの出向が 2 名）を雇用している。

農家の所得は、多い所で年間 60 万となり、農作業を学生が手伝うことで労力的にも助かっているという声が聞かれている。

このように受け入れが拡大し、参画農家の所得を向上できた秘訣を、「販売」と「受け入れ」の 2 つの面からみても。

●営業先を絞り、訪問・対面で販売

販売に関しては、1996 年から飯田市が教育旅行の誘致、滞在型グリーン・ツーリズムに積極的に取り組んでいたため、営業先がある程度絞られていた。また、高橋社長ご自身が元旅行会社出身であり、営業のノウハウを良くご存じだったという点が大きい。具体的には、旅行会社の修学旅行担当者がオフィスにいる確率の高い夕方以降に営業に行き、しかもプランの信用度を上げるために飯田市の職員に毎回来てもらっていたそうだ。ホームページに掲載するだけの待ちの営業では誘客は困難であり、営業先は教育機関に直接行くよりも、ある程度教育旅行市場を把握している旅行会社に行く方が効率

的だそうだ。こうした商品の対面販売が、信頼度を高めることに繋がっている。（財）日本修学旅行協会調べでは、小中学校の体験学習実施率は 1986 年に 18% であったのが、2006 年には 61% まで上昇している。高橋社長によると、まだまだ教育機関側のニーズは堅調であり、2 年半後まで予約が埋まっている状態だそうだ。

●受け入れ面の整備のためには、行政の協力が不可欠

受け入れ面については、体験農業に参画する意向のある 500 軒の農家を束ねているという受け入れ可能なボリュームの大きさが、他地域と比較して同社の競争優位な点である。この背景としては、飯田市が 1996 年から教育旅行の誘致や、滞在型グリーン・ツーリズムに積極的に取り組んでおり、同社の取り組みを全面的にバックアップしていたことが大きい。私も仕事で各地域を回っていて感じるのだが、いくら新参者（コンサルも含む）が地域のことを考えてモノを言っても、中々信用されず、提案事業に参画してくれるまでには、かなりの労力を要する。しかし、役所の人と一緒にいくと、すぐに信頼を得られる。行政への信頼度は強い。

農家にとっては参加がしやすいという点も、参画者が増えた要因であろう。同社の商品のコンセプトは「ほんもの体験」であり、農家には、無理せずに普段の暮らしをそのまま体験させることが求められている。高橋社長のお話によると、「無理はせず普段の暮らしを見せる方が、提供者側も楽で、学生も喜ぶ。とにかく無理をしなくて良いから、と言っている。一部の成功者が出れば、追随者が続々と出てくる。」とのことであった。

さらに、この 500 軒の農家を 28 地区に分け、各地区につき年間 2 回ずつの報告会を開催しているのだが、この報告会を定期的実施することで、各農家が他の農家の取り組みを知ることができ、自然と農家の受け入れレベルが底上げされるそうだ。

●住民、事業者、行政のビジョンの共有が最大のハードル

南信州観光公社の取り組みをみると、着地型

観光事業を持続可能なものとするためには、地域住民、事業者、行政がタッグを組んで、同じ方向を見据えること、受け入れ体制を構築することが必要である。同時に、南信州観光公社のように、ターゲットに的確にセールスを行うこと、農業体験のように安定的に集客・売上げを見込める定番商品を持つことが望ましい。

今年お手伝いをした山都町と富士町の2地域では、地域が同じ方向を見据えるという、その最初のステップにかなりの時間を要した。

どちらの地域も中山間地域に位置し、稲作が主力の農村地域であり、今後農業の自由化の流れでますます環境は厳しくなると予想される。そこで、農業が持つ教育的な価値に着目した観光サービスによる所得の拡大への取り組みを進め、その中でも、一定のボリュームの来訪者が定期的に訪れるという教育旅行を柱の1つにするため、教育機関や企業とこうした地域を繋ぐことができないかと考えている。

そのためには、外向けの営業も必要であるが、地域内の仲間をどう増やすか、という点が最も重要である。いずれの地域も、試行的に数十人単位の観光客をお呼びし、小さくても成功体験を積むところから始めている段階であり、プラットフォームとそのコーディネーターは存在するが、自治体や住民とのビジョンの共有という点では、まだまだのように感じる。しかし、今後もコーディネーターの着地型観光に対する本気の覚悟と、コーディネーターの活動をバックアップする行動派の行政職員との良いタッグが構築できれば、地域の中に少数の成功者が現れ、徐々に地域の参画者は増加するものと期待している。

商品開発のお手伝いをした身として、地域への経済的な波及が表れてくれればと思うが、それだけではなく、外部者の目が地域に向けられることで、地元の人が地元の良さに気づき、新たな商品が次々に開発され、それを地域住民や外部のファンが何度も楽しむ。そういった息の長い事業になればと願い、応援をしている。

(はら けいすけ)

260 数年続く水路組合と 4.2km の水路によって維持され続ける大中尾の棚田景観 ～大中尾棚田保全組合の取り組み～

本田 正明

現在、長崎で『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の世界遺産登録に向けた取り組みをお手伝いしている。長崎市の担当者と今回の打ち合わせの連絡をしているときに、「世界遺産への取り組みを契機として、長崎では、関連遺産にとどまらない様々な取り組みをしています。大中尾の棚田では、オーナー制度とか火祭りなど面白い取り組みをしていますよ。一度取材してもらえませんか」と依頼を受けた。

急な話で、事前準備もする暇もなく、取材先へ案内していただいた。長崎市内の市街地から外海地区の大中尾集落まで、車で1時間ほどかかる。その間に事前勉強をしておこうと、担当者に聞いてみるが、『日本の棚田百選』に選ばれていることがわかったぐらいで、内容はわからない。オーナー制度の仕組みがすごいのだろうか、勝手な想像をしながら、大中尾棚田保全組合代表の廣山さんの自宅へ伺った。

●集落と一体となっている棚田

今年 80 歳になる廣山さんの家は、大中尾棚田のちょうど真ん中にある。「この集落は棚田と一体なんです。棚田がなくなれば集落がなくなってしまう。集落のためにも棚田を継続せんといかんのです」と地域の状況を話していただいた。

「荒廃地が見え始めたのは平成10年頃でした。



大中尾の棚田



大中尾棚田保全組合代表の廣山さん

もともとそのあたりには、33haの棚田があったんですが、神浦ダム（昭和45年完成）に10haほど沈んでしまいました。それから本当の棚田が荒廃してしまって、現在耕作しているのは9haほどです」

『本当の棚田』という言葉が気になったので詳しく聞くと、「本当の棚田というのは、人間が歩ける程度のあぜ道しかない田んぼで、大型の機械が入らんです。大人2人でテレー（耕うん機）を運んでやっと耕作できるようなところですよ」「あなた達が車で来た道も平成11～12年頃によく整備されたもので、それまでは人間のあぜ道しかなかったんですよ。だから、今残っている棚田は、道路と水路の条件が良かったんです」といわれた。本当の棚田とは、アクセスや条件が悪い本当に不便な棚田ということらしい。

●約260数年守り続けてきた水路と棚田

水路の話が出たので、ちょうど水源のことを聞こうと思った矢先に、「実は、この集落には水源がないんです」という話をされた。

「4.2km先の山奥から水を引いているんです。大村郷村記に1746年に知行開きをしたと記載されているので、260数年前から水路はあるようです。それ以来、大井手水路組合がずっと水路を管理しています」ということだった。

米どころでは、何kmにも及ぶ疏水や用水路が張り巡らされるのはめずらしくないが、それほど面積のない棚田のために、江戸時代に4.2kmもの水路が整備されているのはあまり聞かない。私が知らないだけかもしれないが、どうい理由があったのか気になってしまう。



勾配に沿って蛇行する4.2kmの大井手水路。保全組合の帯山さんに案内していただいた。

「それはよくわからんですよ。当時でも田んぼの面積はあまり変わらなかったと思います。33haの田んぼのために、なぜこんな大規模な工事を行ったんでしょうか。古文書などの文献を調べたいのですが…」ということだった。「ただ、いろんな言い伝えは残っています。水勾配は1000分の1といわれていますが、目視ではほとんど水平に見えます。江戸時代にどうやって正確な勾配を図ったのか。ロウソクの灯りを頼りに勾配を測ったのではという話が伝わっています。それと水路の途中に七丈ヶ滝の断崖絶壁があるんですが、そこは、殿様が千両箱を積んでも、事業者ができないと渋ったという話も残っています」

●水路管理が棚田維持の要

本当は、棚田オーナー制度の話を聞くつもりだったのだが、水路の話で盛り上がってしまった。しかし、その水路の管理こそが大中尾の棚田を維持していくための“要”になっているのである。皆さんには、もうしばらく水路の話におつきあい願いたい。

「昭和57年の長崎大水害が起こる前まで、この水路は土水路だったんですよ。冬から春までの半年間、水路は遊んでいます。その間に穴が空いたり、落ち葉が詰まったりするので、春先には、水路組合員が総出で赤土で補修したり、清掃したりしていました。当時は30～40人の人手で20日間はおかかっていました」

「長崎大水害の被害で、高齢者も増えたとし、管理もしんどいので、もう水路は止めようかという話も出たのですが、地域の大切な財産だからなんとか残そうと説得しました。ただ管理が大



水路の入口。岩盤の上に堰がつくられている。

変なので、U字溝を入れたんです。おかげで漏水もなくなり、土砂上げや草刈りなどの水路組合総出の作業も1日で済むようになりました」「今は、月20万円で人を雇って、大雨のときの水抜きなど、定期的な管理を半年間お願いしています。これがあるのとないのとでは、維持管理の手間が全然違うんですよ」といわれるように、水路の維持管理のために、半年間の雇用まで行っている。実は、このことが棚田オーナー制度などの取り組みにもつながってくるのである。

●すべての取り組みは、地域を維持するため

大中尾棚田保全組合ができたのは、平成14年のこと。地主も含めて42名の会員で組織されている。平成12年から始まった中山間地域等直接支払制度の受け皿としてつくられたので、メンバーは、大井手水路組合とほとんど一緒なのだそうです。

大中尾棚田保全組合では、棚田オーナー制度の他に、学童保育や修学旅行の農業体験の受け入れや案山子コンテスト、フォトコンテスト、棚田を竹灯籠で彩る火祭りなど様々な取り組みを行っている。

どうして、都市との交流に取り組むのかと聞いたところ、「基本的な考えは、『地域をどう持続するか』です。学童保育の受け入れにしても、将来まちづくりを担う子ども達に、田んぼに親しみをもってもらい、棚田の風景を心に留めておいてほしいという思いでやっています。それと、私たちには、都市の情報が少ないので、情報交換の意味合いもあります」ということだった。



言い伝えの残る七丈ヶ滝の難所。分かりづらいが、水路の右は何10mもある絶壁。

棚田オーナー制度も目的は同じである。年間3万円の会費で、田植え・草刈り・稲刈りなどの体験メニューの他、収穫したお米を30kgほどいただけるが、オーナーには棚田だけでなく、水路の状況も見学してもらっている。そのためか、水路清掃にも参加希望があるそうだ。

「本当にここは、農業では儲からんです。26軒が耕作していますが、一軒あたり3反ほどこしか田んぼがありません。自家消費分と親戚に配る分を引くと、ほとんど余らないんです」といわれるように、棚田オーナー制度は、地域のPRや外部の仲間づくり、水路の維持管理には貢献しているが、農業の収益には関係がない。私は、てっきりオーナー制度が収益の柱となって、地域維持のモデルができていたのではないかと思っていたので、『ここでの農業は儲からない』と割り切られていることに、少なからず衝撃を受けた。では、地域の農業を担う後継者問題はどうか。

●自分たちの代で終わりと考えないでくれ

現在は、80才代（7人ぐらい）が中心となって農業をしているが、幸いにもそれぞれに後継者がいるのだそうだ。田植えや稲刈りなどの農繁期は、週末に息子さん達が帰ってきて農作業を行い、日々の管理は、地元に住む80才代の世代が行うという役割分担ができています。

「これは非常に強みです。このつながりを70才代後半の人たちにもきちんとつなげなければいけない」ということで、2月末には、長崎県内に居住する地元出身者を集めて、農業の継続に関する意見交換会を行っている。

「30数人ほど集まってくれたでしょうか。そ

の席では、ここでは農業は成り立たないので、定年後に帰ってきて、年金をもらいながら農業をしてほしいと伝えました。それと、自分たちの代で終わりと考えないでくれ、今の時点から子ども達にも農業に慣らしてほしい、とも伝えました」「棚田がなくなれば、自分たちの故郷がなくなってしまう。後継者が出てくるまでは、この意見交換会は続けていきます」と言われた。

話を聞きながら、これまで何気なく見ていた棚田の風景は、利便性や経済性を超えて、地元の人たちのたゆみない活動や地域への愛情によって支えられていることを目の当たりにし、ただ敬服するばかりだった。長崎では、キリスト教関連遺産だけでなく、魅力的な地域づくりがいたるところで行われているのである。地域の底力を感じずにはいられなかった。

最後に一番肝心なことを聞き忘れていることを思い出し、「ここのお米っておいしいんですか」と聞いてみた。

「どこにも負けない自信がありますよ。100%かけ干しですから、全然味が違います」と満面の笑みの回答だった。棚田オーナーのリピーター率が7割なのも、米のうまさあってのものなのかもしれない。新米の季節にまた取材に来たいと思った。(ほんだ まさあき)

そこには暖かな心の“日だまり”があるようだった
～ NPO たすけあい遠州の「もうひとつの家」の取り組み～

山田 龍雄

平成22年度、国土政策研究助成にて「新たな公の取り組み」というテーマで「タイムバンキング（時間通貨制度）」の研究をしていることは、前々回・前回発行の「よかネット」でも紹介し、これまでイギリスやアメリカの事例を紹介してきた。

昨年の8月に（財）さわやか福祉財団にヒアリングに行ったときに『実は我が国でも時間通貨制度に取り組んでいる団体は40箇所ぐらいあって、比較的上手く運営しているのは、静岡



ＪＲ袋井駅前にある間口２間の「街の居場所～もうひとつの家」

の「周」と徳島の「ふれあい切符」です』という話を聞いていたので、是非、どちらかの視察をしておかなければと思っていた。

そこで、1月末に静岡県袋井市で活動している（NPO）たすけあい遠州の代表である稲葉ゆり子さんにお会いし、これまでの約17年間の活動の話をお聞きした。

今回も共同研究している（NPO）グラウンドワーク福岡（以下GW福岡）の大谷事務局長と齋藤さん、私と当社の原の4名でお伺いした。

●誰もが立ち寄れる場所づくり

福岡発の7時過ぎの飛行機に乗り込み、羽田空港に9時頃到着し、レンタカーで一路袋井市に向かった。稲葉さんから指定された場所は、ＪＲ袋井駅前近くの商店街の一角にあった。

そこは間口2間程度であり、玄関の開き戸を開け、中に入ると奥行き5～6mの部屋（さらに奥には厨房あり）には15人程度の人が立ち寄り、ランチを食べたり、休息をしたり、談笑したりと思いつきの時間を過ごしているようであった。

この部屋の角に設けられている座敷には全員90歳以上の高齢者7～8名の方々が、トランプを楽しんでおられた。しかも、何か賭けでもしているのか、“おはじき”をやり取りしており、皆さん明るく、お元気な様子に驚かされるとともに、部屋には何かほのぼのとした雰囲気伝わってくる。

我々4人は、中央の丸テーブルに案内され、300円のランチをいただいた。ランチは、アジ

フライ、エリンギのソテー、ほうれん草のお浸し、コンニャク・ニンジン炒め物のおかずのみそ汁とごはん一膳と丁度良い量であった。

ここ「もうひとつの家」とは、「いつ来てもよい、いつ帰ってもよい、もうひとつの家」というキャッチフレーズのとおり、赤ちゃんから高齢者まで、誰もがふらっと立ち寄り、思い々の時を過ごす場所なのである。

ここは、特に決まったプログラムが決められているわけではなく、ランチ 300 円を目当てに来ている人、買い物帰りに立ち寄った人、JR やバスの時間までの待合いなど、利用する人は様々なようである。取材の日に居た 90 歳の高齢者の人たちは、1 日 1,000 円でランチ、おやつ、自分で帰れない人は送迎付きのサービスで集まってこられる。

稲葉さんに、ここに集まる高齢者のことをお聞きすると「ここに来る高齢者の方は、楽しんでおしゃべりをされるせいか、痴呆にならないようだ」とのことであり、ここは施設と違って普通の暮らしの延長にあるという雰囲気がお年寄りを生き活きさせているのかもしれない。

ここは、空き店舗を活用した約 10 坪ほどのスペースしかないのであるが、この場所には暖かな日だまりが出来ているようであった。

●子育て世帯のサポートから始まり、今は、子どもから高齢者までのサポート

ランチが済み、少し落ち着いたところで、稲葉さんに居場所づくりの経緯についてお伺いした。

- ・代表の稲葉さんは小学校の事務職員を 50 歳で早期退職し、仕事をもち、忙しく帰りの遅い女性のサポートのため、夕食宅配を始めた。当初は 10 名程度でスタート。
- ・ちょうどその時期に静岡県女性センター「あざれあ」がオープンし、女性のためのいろいろな講座に参加する女性たちと知り合い、「これから老いていく、困ったら行政に頼んだらよいと安易に考えるのはおかしい」と思い、今の内に仲間をつくっておいて困ったときの助け合いグループをつくることを考えた。そこで、先ず働いているお母さんに集まっても



トランプに興じる全員 90 歳以上の仲良しグループ

らい、困ったこと、不安に思うことを聞いた。次に主婦や仲間を集ってもらい、サポートして欲しいことを示し、メンバーを集めた。

- ・平成 7 年 10 月に入会金 2 万円の出資を募り、助け合いで夕食サービス（週 1 回）を行う「ふれあい袋井」を自宅でスタートさせる。
- ・平成 9 年には空き家を借りて調理場兼事務所（ごっつおうハウス）として利用する。平成 11 年に「もうひとつの居場所」の原点となる「もうひとつの家」の提供（72,000 円 / 月）を申し出てくれたイチゴ生産者の家ではじめる。
- ・このころよりロコミで高齢者が増えてきて、高齢者、子連れのお母さん、赤ちゃんなどの参加の輪が広がった
- ・平成 12 年から始まった介護保険制度の時に、介護事業所として参加するかどうか悩んだが「プロのサービスはプロにまかせて、介護保険制度ではできないちょっとしたサポートをすること」を目指した。
- ・平成 15 年に 300 坪の屋敷を 15 万円の家賃で借りられることとなり、「ごっつおうハウス」と「もうひとつの家」が合体する。ここは敷地も家も広いので子どもたちもよく集まり、遊んでいた。ここでは平成 20 年までの 6 年間利用した。この場所は家も広く、使い勝手は良かったが中心地から離れていることから利便性に問題があった。
- ・そこで平成 20 年に駅前の空き店舗の賃貸の話があったときに、便利な場所への移転を決断する。（駅前でのオープン は H21 年 4 月）

・「もうひとつの家づくり」のリフォーム費用は200万円を要した。市からは20万円の補助が支給されたが、残りは(NPO) たすけあい遠州の資金と材料支給で行った。具体的な作業では、当初の掃除はボランティアが行い、リフォームの手間は工務店などの、知り合いの人のボランティアでやってもらった。

ここは、誰もが立ち寄り、自由な時を過ごす場所であるが、週2回の音楽療法、月1回(第3金曜日又はゲストの日程)の交流会を行っている。交流会の会費は、食事とお酒付きで300円と破格の安さである。

取材当日は、GW福岡の大谷事務局長がゲストスピーカーとしてGW福岡の取り組みを紹介した。交流会では袋井市の地域振興課、生涯学習課、観光協会会長、他のNPO団体、新聞記者など多彩なメンバーが10数名参加されていた。また、大谷さんの講演終了後の懇親会では、静岡おでん(大きめの茶碗一杯分)、さくらめし(単にミリン入り醤油ごはんであるが、この地域ではさくらめしと言うらしい)、鮭の包み焼き、ごま豆腐、ブロッコリーサラダ、花豆の甘煮等ご馳走とお酒で座が盛り上がり、袋井市の夜を堪能させていただいた。これも懇親会のお世話をする人が、料理得意のベテラン主婦が多いために、このような何種類もご馳走を用意できるのであろうと思った。しかも、おみやげに袋井市の名物のメロンパンをいただき、大歓迎を受けた。

このような気楽に参加しやすい雰囲気交流会は、この居場所づくりを支える人たちのネットワークづくりにつながっているようだ。

●自主独立の運営費の中心は古紙回収

「もうひとつの家」の運営費は、会費とランチ費用と古紙回収事業で捻出しており、行政の補助金は全く入っていない。運営費は月20数万円程度を要し、うち73,500円が家賃に充てられている。会員は約200名(入会金2,000円、年会費1,000円、賛助会費3,000円)で、毎月会員向けの通信を出しており、会費のほとんどは通信事業に使われている。

この居場所の料理づくりや利用者の応対に

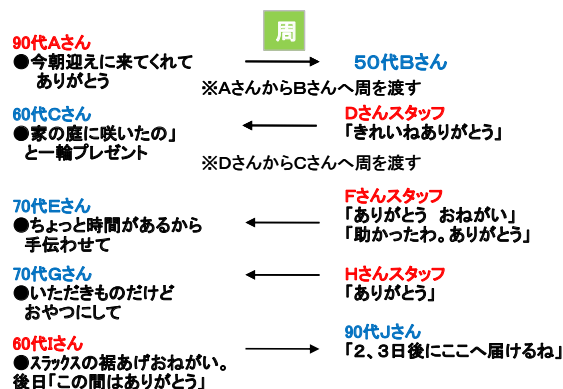
は、一日あたり4~5人の有償ボランティア(時間当たり500円)が手伝っている。

有力な事業資金は、古紙回収事業である。第2水曜日に市役所駐車場(事業所用)、第4土曜日に同じく市役所駐車場(一般ゴミ)、毎月11日にはジャスコ(一般)で実施しており、集めた古紙は袋井市内の製紙会社買い取ってもらっている。古紙回収リサイクルは老若男女、参加しやすいボランティアであり、資金源としても貴重な事業となっている。上質紙と新聞紙に5kg単位で分けてもらい、所定の場所に出してもらおう。上質紙5kgでティッシュペーパー1個、上質紙10kgでトイレトペーパー1個、新聞紙15kgでトイレトペーパー1個と交換となっており、このトイレトペーパーを現金に換えている。

●時間通貨「周」は、お互いの「感謝の気持ち」のやり取り

(NPO) たすけあい遠州の時間通貨の導入は比較的新しく、平成16年である。時間通貨の単位となっている「周」の理念は、サービスとサービスの交換ではなく、「感謝」の気持ち、ちょっとした手伝いや「ありがとうの気持ち」を形に表したモノとして考えると分かりやすい。次のような話しが、この場所で流通している「周」のイメージを良く伝えている。

ある晴天の日に、90歳のおばちゃんがもう「ひとつの家」に入ってくるなり、「今日は富士山がきれいだった」という話をしたときに、居合わせた痴呆のおばあちゃんが「だからあなたの瞳はきれいなね」といったそうだ。そのとき



時間通貨「周」のやり取りの一日
(資料：たすけあい遠州の説明チラシより)

に、その言葉に感動した周り人たちは「おばあちゃんに周をあげないといけないね」といったという。

この「周」は、便宜的に時間通貨という名称は付けられているが、1つの行動、1つの感謝に与えられるものであり、単純に1時間単位のサービスのやり取りというわけではないのである。サービスを仲介するようなコーディネータ又はタイムブローカーという役回りの人はおらず、自然と「周」でのサービスを依頼することが浸透している。これは、これまでの16年間の活動の積み重ねであり、時間通貨導入の7年間の賜物と思われる。

稲葉さんをはじめ、ここのスタッフは、サポートしてもらいたい人がいた時は、サービスをしてくれそうな人に「周」で頼めないかを打診するとのこと。

具体的な「周」のやりとりの事例としては前項ようなことがあげられる。

「周」は10枚単位200円で販売しており、「周」が欲しい人は購入し、利用することとなる。また、「周」が10枚溜まるとランチ1食分が無料となる。チケット「周」は手づくりであり、「良いことをしたら、小さな花が咲く」といった絵本「花咲き山」をイメージしたデザインとしている。

私は、当初、タイムクレジットは単にサービスとサービスのやり取りを、お互い様の精神、相互扶助といった精神で使うツールとして考えていたのであるが、「周」の根本的な考え方のすばらしさに触れて、目から鱗といった感動を



「花咲き山」をイメージした、手づくりの時間通貨チケット「周」

覚えた。また、同時にタイムバンキングの本来の精神は、お互いが「ありがとう」と言い合える精神がベースにあって上手くいくし、継続していくモノだと改めて思い直したものである。

(やまだ たつお)

「ド・ロさまそうめん」事業は、今も引き継がれ、ド・ロ神父の味を守りつづけている

山田 龍雄

今年度、長崎市の仕事を受けた関係で外海（そとめ）に行く機会があり、復活してから20年、取材に行ってから10年が経過した「ド・ロさまそうめん」が、今どうなっているのかが気になり、外海地区出津（しつ）にある新しい工房を訪ねた。

長崎市内から国道202号にそって北方面に向かい、長崎市外海地区（旧外海町）の案内看板を過ぎたところから急に明るく視界が広がり、左側に海、右側に急峻な山々がみえてくる。

この地に明治12年にマルコ・マリ・ド・ロ神父（以下ド・ロ神父）が、パリ外国宣教会の外海地区の出津教会司祭として赴任されたのである。「ド・ロさまそうめん」の話をするためには、開発者の「ド・ロ神父」のことを説明しないといけない。

●住民の仕事づくりのひとつとして始める「そうめんづくり」

ド・ロ神父は、キリスト教の布教活動とともに、外海の貧しい暮らしを救助するため、フランスの家族から譲り受けた莫大な資財を投じて、母国フランスで身につけた建築、医学、農業、



長崎市内から車で約50分で外海地区出津に到着できる



ド・ロ神父

印刷などの幅広い知識を活かした事業を行っている。ド・ロ神父は農地開墾、パン・マカロニ・そうめん・織物などの授産事業、教会堂建設、保育所建設、防波堤や道路整備など、村人たちへの仕事づくりや農業や生活の基盤づくりに生涯を費やした人であり、今でも地域からは「ド・ロさま」として崇められている。

ド・ロ神父は、最初にマカロニを創ったのであるが、日本の食習慣になじまず、これを長崎市の洋館居留地へ売っていた。そこで、当時、既にこの地方でも食文化として定着していた「そうめん」をド・ロ神父が、開発したのであるが、いつしか製法は長らく途絶えてしまっていた。ちなみにこの地域一帯に知られている「そうめん」といえば、「島原そうめん」である。

司馬遼太郎の「街道がゆく～島原・天草諸道」で、司馬氏一行が西有家町の素麺製造所を訪ねるところのくだりを読むと、『島原そうめんは、島原の乱後（1637年）、小豆島から島原へ入植したひとびとによって伝えられたということは、ほぼまちがいない』と記されている。そうすると1600年代中期には、この地方にそうめんは伝来し、食されていたと想像される。

●昭和56年に「ド・ロさまそうめん」復活

「ド・ロさまそうめん」の復活の話は、「よかねっと50号（2001.3：尾崎正利文責）」に詳しく掲載している。概略は下記のとおりである。

- ・試作にあたっての最大の課題は40数年前に途絶えてしまった途中のブランクを回復することであった。
- ・製法も文献が残っていなく、当時、ご存命の修道女の方の記憶から製法の雰囲気を手が



モダンな建物になったド・ロさま麺工房

りにした。

- ・地域の生活改善グループなど5つのグループで取り組みをスタートさせたが、4つのグループが資金や人材等の理由で事業を断念し、最終的には出津農産加工組合だけが残った。
- ・地区内の民家を借り受け、製造用の道具類は家庭から持ち寄り、4kgの小麦を手でこねはじめた。
- ・改良普及所と外海町の指導員などの協力、島原の製造見学などを行って技術力を高めて、一年経つ頃には「何とか活かそう」という感じものが出来た。
- ・昭和58年の県の補助事業に採用されたため、工場が新築され、生産能力は向上した。
- ・当時の生産量は180kg／日程度であった。

●その後、㈱サンフリースの「ド・ロさまそうめん事業部」として事業継続、展開

出津文化村に隣接している新しい工房を訪ね、工場長の林田伸一郎氏と藤田善文係長のお二人からお話をお伺いした。

- ・現、工場長の林田さんは、平成6年に創業者のお父さん（林田準治氏）から仕事をまかされ、平成13年に実質的に出津農産加工組合の経営を引き継ぐ。しかし、人口減少や食の多様化による素麺需要の低下、そうめん業界の競争激化、従業員の高齢化などから非常に厳しい状況が続いていた。
- ・林田さんは先代が苦勞して開発し、事業を継続してきた事業を縮小していくのか、資本がしっかりしている企業の傘下に入り、事業を伸ばしていくのかを悩まれる。事業縮小して、



工場内部の様子 取材した日には、そうめんではなく平麺をのばしていた

家内工業的にやれば、継続できないことはないと思ったが、これでは発展もしないだろうと思った。

- ・平成18年頃に、当時、原料となる小麦等の材料を卸して頂いていた㈱サンフリーの藤田さんに相談すると、すぐに社長に掛け合ってもらい、㈱サンフリーの社長も「ド・ロさまそうめん」の火は消してはならないと「出津ド・ロさま麺事業部」を立ち上げる。
- ・この当時、伊藤一長長崎市長からの応援もあり、産炭基金を活用して新たな加工所の建設を行った。補助率は3/4、残りはサンフリーが出資している。このときに手延べだけは変わらないが、練りや袋詰めなどは最新の機械設備を導入している。
- ・正式には平成20年12月に「出津農産加工組合」を「出津ド・ロさま麺事業部」として事業継承し、12月より操業開始する。

●商品のアイテムは増加

10年前に取材した頃の生産量は、180 kg/日であった。現在も生産量は200 kg/日と少し増加しているものの大きな生産量のアップはないようだ。しかし、商品アイテムは、そうめん以外にうどん、平麺、パスタと商品アイテムは増えており、贈答用の詰め合わせセット商品も9種類と多い。

販売先は、長崎市内及び周辺の直売所、スーパー、お土産店などの店舗販売と個別注文販売であり、景気の影響のためか、ギフト関係は減ってきたそう。個別注文販売と店舗販売での販



最初お会いしたとき、先代のお父さんではないかと勘違いした林田工場長

売額の比率は6：4と個別注文販売の比率が高い。「ド・ロさまそうめん」を一度食べた人は、気に入って、再度注文してくれている割合が高いと思われる。

現在の従業員は、10年前と変わらず、正社員3名とパート6名の体制で行っており、売上げは約3千万～3千5百万円とのこと。

従業員のうち3名がカトリックであり、10年前の記事に記してあるが、日曜出勤する場合は神父の許可が必要であり、日曜出勤で頂いた賃金の一部を教会に寄付するようになっているそう。

従業員の働き方は、カトリック信者の多い地方ならではの習わしは変わっていないようだ。

●なぜ、ド・ロ神父は落花生油をつかったのだろうか？

「ド・ロさまそうめん」の最大の特徴は、引き油に落花生油を使っていることである。

「パスタであれば、オリーブオイルであるのに、神父さんは何故、そうめんを伸ばすのに落花生油を使ったのですかね」と林田さんに質問すると「それがわからないのですよ。明治初期の長崎では中国人も多く居住していた関係で、落花生油を使っていたと考えられ、手っ取り早く落花生油が入手できたからではないでしょうか」とのことである。これは天国に召されたド・ロ神父に直接お聞きしないとわからない話である。

また、林田さんは「落花生油は、普通の菜種油の2.5～3倍の値段であり、イタギの行程（最

初にこねた小麦粉を丸める行程)で、少量使用するのが良いが、大量に使用すると、大変ですね」とおっしゃっておられた。

●今後はブランド力の強化とパスタ製造

現在、各メーカーともそうめん自体の味そのものに大差がなくなってきたこと、「ド・ロさまそうめん」自体が島原のそうめん、五島のうどんといった地域ブランド力がないこともあり、「ド・ロさま麺商品」の生産額は伸び悩みである。

「ド・ロさまそうめん」は美味しいのであるが、知名度が低いことが最大の弱みであり、長崎県内でも「ド・ロさまそうめん」の認知度は五割程度らしい。本社としても会社のブランド品として伸ばしていきたいと考えており、今年は積極的にPRを強化していく予定であるという。今後の展開が楽しみである。

「ド・ロさまそうめん」を購入して10年ぶりに食してみると、小麦粉の臭いもなく、弾力もあって喉ごしもよく、美味であった。

福岡では、博多区川端町のリバレインの前の福岡銀行博多支店ビル1階にある長崎県アンテナショップ「キトラス」のみで購入可能なので、「麺好き」「麺こだわり」の方は是非、ご賞味ください。(やまだ たつお)

蔵の中に商店街がつめこまれた 「ありえ蔵巡り」視察

寺山 香

最近、長崎市からの仕事の関係で、長崎市の外海(そとめ)地区に行っています。昨年2月、外海地区にまちづくり協議会が立ち上がり、協議会の活動「先進地研修会」に同行させていただきました。研修先は、長崎県の南島原にある有家町地区です。この地区は、古くから商人のまちとして栄え、古い商家の風情を残した町並みのなかに、神社や古寺、キリシタン文化などさまざまな顔があります。中でも、町の名所的存在が酒、味噌、醤油などの蔵です。有家町はそれらの蔵が季節ごとに行うイベント、「ありえ蔵巡り」で人気を博しています。

●歩く途中に長崎ならではの多くの発見が

「ありえ蔵巡り」のメインとなる蔵は壺の蔵～五の蔵まであり、すべて回ると4～5Kmになります。特に五の蔵、素麺工場は車を使う距離にあるので、まち歩きは四の蔵からスタートします。ガイドとして、壺の蔵の事業主でもある「ありえ蔵のまち保存会」の吉田さんが案内をしてくれました。

蔵に行く途中の道端には、石垣、お地藏さま、なかにはそろばんをもった恵比寿さまなどがあります。ある蔵の近くの石垣は、大通りから見えるところはきれいに整備されていました。こんな発見があるのもまち歩きの醍醐味。つい立ち止まって眺めてしまいました。

●蔵を巡りながら「買う楽しみ」を見つけるイベント

それぞれの蔵では、お雛様の展示に加え、商品販売も行われています。その蔵だけのものではなく近隣の商店からも出品されているようです。酒、味噌、醤油に加えて素麺やお餅、ソフトクリーム、コーヒーなども販売されているのですが、中でも面白いのは、「味噌掬い」です。しゃもじで一回だけ掬った味噌をもらうことができるのですが、お客さんの中には500円で4.5kg近くを掬った人もいました。

各店をまわれば、地域のほとんどの商品を買うことができるのでは、というほど、まさに商店街が詰め込まれているようです。蔵以外の場所でも、蔵巡りに便乗して商店がさまざまな商品を出しています。中には蔵巡りの時だけカフェ兼食事処、いつもは美容院なんて場所もあったりします。手作りの張り紙がなんとも味のあるお店でした。

地域の人や店が気軽に参加できるイベントであることも、有家町のひとつの魅力なのかもしれません。この時期は、蔵開きの2日間だけ開催するとあって、観光客で大いににぎわっていました。ある店のパワーに負けて、つい日本酒とあごだしを購入してしまいました。

まち歩き後、協議会のメンバーも、「ほしいと思うものがある、買う楽しみをうまく作っている」との評価をしていました。



歴史を感じる蔵巡り

●蔵経営者がつくるまちづくり協議会「ありえ蔵のまち保存会」

壺～五の蔵を巡ったあと、足の疲れを感じながらも「ありえ蔵のまち保存会」代表の吉田さん（壺の蔵）、伯川さん（参の蔵）との意見交換会を行いました。

ありえ蔵のまち保存会は、地元商工業者と町民ボランティアガイドによる「おもてなしの町づくり」体制を構築し、散策・回遊できる町づくりを推進しています。また、資産価値の高い蔵を中心とした古い街並み景観を将来に引き継ぐために、保存・修景などの計画も併せて行っているそうです。

保存会の変遷は次のようになっています。

- ・平成 17 年、壺の蔵にて蔵開きイベントを開催、メディアに取り上げられたこともあり、好評を博す。
- ・同年、一店逸品運動のひとつとして、一店逸品蔵めぐりを開催。
- ・平成 19 年、市町村合併を契機にありえ蔵のまち保存会を設立。県の「21 世紀まちづくり推進総合支援補助事業」として活動を開始。
- ・平成 23 年、支援事業が今年終わりを迎えるため、今回から自主事業としてスタート。同時に長崎の地域文化賞を受賞。

また、今年から新しく観光ガイドも始めたそうで、現在研修が行われているところです。メンバーは、蔵のメンバーと、長崎さるくなどで活躍している、「NPO 法人コンプラドル」の支援を受けて行われています。

これまでの企画としては、商業ポスター展、映画ポスター展、木製看板・ホーロー看板展な



蔵の中とは思えないほど両端に店舗が並びます。

どの展示のほか、「長崎さるく」のイベントのひとつとしてお座敷の中でのガイドや、「長崎音楽祭」のイベントとして各蔵でのミニコンサートが行われました。これらの企画の提案を、みんなで集まって考えたと思いきや、吉田さんが一人で考えたそうです。

●各蔵の自主性に任せていた運営や展示

蔵の中にたくさんの店舗が入り、賑わいを見せていた「蔵巡り」でしたが、地元住民の協力に関しては、当初の一店逸品運動のころは参加者も多かったようですが減ってきているようです。そこで、参加を増やすために、蔵の中に入る店舗から、出店料の参加費 3,000 円とスタンプラリーの景品料 3,000 円程度の品物をもらっているそうです。しかし、基本的には蔵ごとの運営に任せ、売り方や展示などは無理の無い体制で行ってもらうようにと、自主性に任せているそうです。

町を歩いていて感じたのは、歩く距離と案内板の少なさでした。その対策はどうしているかというと、案内板に関しては自分たちで設置し、足りない分はスタンプラリーで道を記載することで、案内面をカバーしているそうです。観光ガイドでそれを補っていききたいとのことでしたが、行政との連携が今後必要かもしれません。

今まではほとんど行政が入ることなく運営を行ってきたそうですが、観光客が増えるにつれ、どこかでうまくかみ合わせていく必要を感じている、とのことでした。

●お客さんが喜んでくれることが協議会、地元の大きなモチベーションになっている

最後に、協議会を続けていくためのモチベ



まちの名物
「そろばん
えびす」

ションは何かという質問に対して、次のような答えが返ってきました。「実はこの蔵巡り、集客は多いかもしれないが、利益としてはそれほどでもない。なぜ続けるのか。一番はお客さんが喜んでくれること、近所にいるのにはじめてみた、蔵に入って感動したといってくれるお客

さんのために、イベントを行うこと、これが一番のモチベーションになっている。」

「ありえ蔵のまち保存会」がまちづくりを行っていくうえで、それぞれの商店が無理のない活動をしていること、地元の同意を得つつ、活動を無理強いしないことなど、地元とのバランスの取り方がいいのではないかと感じました。なによりもお客さんはもちろん、蔵で販売しているお店の方が本当に楽しそうな姿が印象に残りました。「お客さんが増えれば、地元の人もやる気になります。実践を見せることが重要なんです」と言われていたとおり、有家の人たちがやる気を持ち始めているように感じられました。
(てらやま かおり)

ポイントカードで勉学意欲を高める 静岡科学館「る・く・る」

山田 龍雄

現在、美術館や博物館などの公共施設の管理運営は、主に財団法人やNPOあるいは民間企業などの団体に指定管理者として委託するのが主流となっている。

当社では、指定管理者として上手く運営している団体の事例調査をしている。今回、人口約72万人の都市としては利用者が多い「静岡科学館～る・く・る」の増田俊彦館長にお話を伺った。

ちなみに「る・く・る」とは、「みる・きく・ふれる」の末尾の組み合わせである。

●静岡駅前にある再開発ビルの3フロア（8～10階）で運営

元々、この静岡科学館（以下「る・く・る」）の構想は、老朽化していた旧児童会館の建替えを構想していた時期に、ちょうど駅前の再開発事業の計画があったことから動き出したようだ。平成14年7月に再開発組合と静岡市が保留床の売買契約をし、平成16年2月に指定管理者として（財）静岡市文化振興財団（以下「財団」）と契約、同3月にオープンしている。

このビルに入ると1階奥に科学館専用の出入口コーナーがあり、ここで前もって自動販売機

でチケットを購入、専用エレベーターで10階の案内フロアで降りる。取材した日は土曜日であったため、エレベーターから降りた途端、賑やかな子供たちの声がフロア中にこだましていた。

●今だに増加傾向にある利用者数

通常、このような施設の利用者は、3年目ぐらいから減少に転じるのだが、この科学館は、オープンして7年が経過しているにもかかわらず、増加傾向にある。利用者数の平成21年度の実績は約28万人と平成20年度より約4万人増加している。また、平成22年度の実績は、まだ集計中であるとのことだが、平成21年度と同等か少し下回る程度ではないかとのこと。

利用圏域は1/2が静岡市内、1/3が静岡以外の県内各地域、1/6が県外であり、JR静岡駅前にあることから、東海道沿線の市町村からの利用が多いらしい。この施設が凄いのは利用者の半分以上がリピート客であるということだ。

増田館長の説明から、利用者やリピート客が多い理由を要約すると次のようになる。

- ①オープン後7年目に入って、かなり県民に「る・く・る」の存在が浸透してきたことが大きく、徐々に市内利用から市外利用者へと拡大している。
- ②指定管理となったことで、目標入場者数を達成しないと契約料がダウンされるという危機



「る・く・る」は、この再開発ビルの8～10階にある

感もあって職員のモチベーションが高まり、多彩なサイエンス講座やイベントを企画している。

③学習意欲を高めるポイントカードである「る・く・るカード」の役割が大きい。

●「る・く・るカード」とは

利用者増に貢献している「る・く・るカード」は、非常に良くできている。もし、私の子ども時代にこのような施設、システムがあったら何度でも足を運び、ポイントを増やして、仲間に自慢しているであろうと思った。

そのシステムの概要は下記のとおりである。

- ・入場者で会員希望の子どもに「る・く・るカード」を発行。発行料は500円／人。印刷代やチップ代を入れると赤字であるが、リピート客、特に親と一緒に来ることで入場料収益（大人500円）につながる。
- ・施設内の体験器具やパソコンなどの学習を体験した後、カードを器具の前に設置している装置にタッチすると6ポイントが溜まるようになっている。3,000ポイント溜まると「サイエンスマスター」の称号を与えられ、メダルと賞状が授与される。これまでに2万ポイントを貯めた子どもが数人いるそうだ。
- ・「る・く・るカード」には認証番号が付いており、体験装置の中では自分が体験している様子が自動的にカメラで撮影され、HPにアップされる仕組みになっており、家庭でも楽しめるようになっている。

●他の指定管理施設とのコラボ企画が、各施設の魅力を高めている

財団は、他に美術館、音楽館、市民ホール、

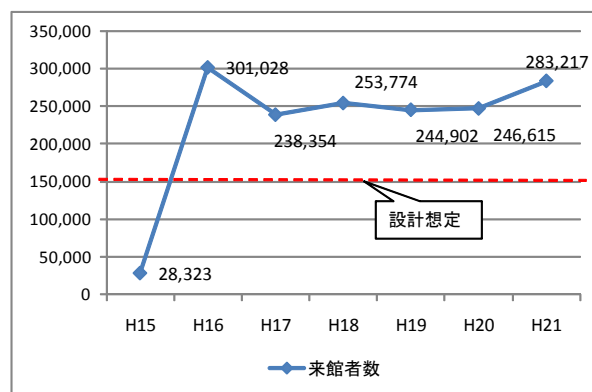


図 増加傾向にある利用者数

生涯学習センター（市内10箇所）の指定管理を受託している。職員は総勢210人おり、「る・く・る」のスタッフ数26名（館長1名、プロパー8名、嘱託職員15名、臨時雇用者2名）である。

増田館長は「財団が美術館や音楽館を運営していることで、企画のテーマによっては、施設同士がコラボすることで相乗効果を高めている面がある。具体的には美術館で動植物の絵画の展示があったときには、科学館で動植物をテーマにしたサイエンス講座を行うようなこともしている。また、科学館で弦楽器の仕組みについての企画をしたときには、音楽館では弦楽器の演奏会をしたりと、お互い連携することができるのが、同じ財団で指定管理している強みでもある。」と言われていた。

このように財団としては大所帯であるが、同じ財団で他の公共施設を運営していることが、連携しやすい環境を生み出している。財団では、昨年からは市内10箇所の「生涯学習センター」の指定管理を受託した。

館長は、この機会を活かし、サイエンスの出前講座などを行い、「る・く・る」とのつながりをつくり、もっと市民レベルで科学の面白さを浸透させたいと考えておられる。

●自前の展示用制作スタッフを設けている

「る・く・る」の年間の運営費（人件費込み）は約3億円であり、その内訳はサイエンス講座等の事業費2千万円、広告費500万円、器具等のメンテナンス費用1千2～3百万円となっている。「る・く・る」の運営の特長としては、器具等のメンテナンスを定期的実施していることから故障が少なく、当初からの器具をそのま

ま使用しており、全く入れ替えていない。また、自前で施設内の簡単な維持管理や展示用の器具等の制作ができる専門スタッフを抱えている。また、このための専用の制作室（ファクトリー）を設けている。

●市民や大学等との連携が科学館「る・く・る」の魅力に厚さを増している

「る・く・る」で最も魅力的に感じたのが、この施設を取り巻く人材のネットワークである。講座を企画するにしても科学に携わる多くの人たちの支えがないと実現しないわけであり、館長自身も戦略的にネットワークをつくってこられているようだ。

市民との連携では、市民公募によるボランティアの70名をサイエンスナビゲーターと位置づけ、サポートが必要なときに応援を頼んでいる。また、市民グループ5団体（中・高校生の先生退職者グループやお母さんグループ等）の応援もある。

館長のネットワークとしては、元々中学校の科学の先生をしていた関係もあり、中学校、高校の科学の先生たちで「静岡サイエンスミュージアム研究会」を立ち上げ、この研究会のメンバーが月1回サイエンスアドベンチャーというセミナーを実施しているそうだ。

大学や他の科学館との連携では、静岡県内の大学の理工系の先生達（静岡大学、東海大学、静岡県立大学等）とのネットワークも形成し、サイエンス講座やセミナーの講師依頼をお願いしている。また、科学館同士のネットワークもあって、日本科学未来館や国立科学博物館の先生たち（サイエンスコミュニケーター）にも講師をお願いしているそうだ。

施設運営においては稼働率を高め、利用者を増やすこと、維持し続けることが最大の命題であると思うが、このような観点からみると「る・く・る」は、模範となる運営を行っている施設の部類に入るのであろう。これも「る・く・る」が地元の人たちや地元大学などと、上手く連携・協力が得られているからこそ出来ているのである。

当たり前のことではあるが、このような連携

体制を築いていくことは、市民にとって価値ある施設としていくため、構想の当初段階から、参画・協力してくれる市民グループなどと施設の企画や運営について十分話し合いを重ねていくことが肝要であると思った次第である。

（やまだ たつお）

地域の祭りのすごさをみた 「高千穂夜神楽見学」

寺山 香

昨年12月18日、地方シンクタンク協議会九州・沖縄ブロックの活動の一環で、若手交流会と称して宮崎県高千穂に夜神楽を見に行きました。以前からぜひ行きたいと思っていたのですが、いい機会と思い、企画を行いました。参加者は当初の予想5～6人を超え、9人となりました。

昼前に高千穂に着くと、今回夜神楽に案内をしていただく高千穂町役場企画振興課の興梠さんがお迎えをしてくださいました。昼食に高千穂牛をいただいたあと、午後は高千穂の観光ガイドさんに案内をお願いしました。

●神の宿る場所、高千穂のパワースポットは集客力抜群

以前はバスの添乗員をされていたというガイドさんの流れるような解説を受けながら、高千穂峡、くしふる神社、荒立神社、天の岩戸神社、天安河原の5ヶ所をまわりました。神の宿る場所ということもあってか、そこかしこから神聖な空気を感じることが出来ます。また、荒立神社などは天鈿女命（アメノウズメノミコト）と猿田彦命（サルタヒコ）を祭っていることから、恋愛、芸事の神さまとして近年人気が出ているそうです。

ここ最近、高千穂はパワースポットとしても人気が出ているそうで、特に天安河原は、江原啓之氏に紹介されたこともあり、人氣が爆発的に広まったそうです。実際に天安河原ですごいパワースポットだと評された橋の上に立ってみました…パワーを感じるまではいきませんでした。ガイドさんオススメの観光スポットとし

ては、住吉神社だそうです。ここは靈感が強くない人でも入った瞬間パワーを感じることができるとか。実際にガイドさんも何か“感じた”そうです。

●順調に見える高千穂観光ですが…

夕方からは、観光協会の吉本事務局長、工藤主任に高千穂の観光についてお話をお聞きしました。

- ・高千穂の観光客は、パワースポットブームや東国原知事効果で、2010年には150万人を超えた。
- ・現状で150万人を受け入れるには限界があり、今後はいかに観光客を増やすかではなく、どれだけ1人ひとりのおもてなしを行えるかを考えていかなければならない。
- ・一方、宿泊客は年間15万人ほどで、宿泊客を増やすには現在来ている観光客の滞在時間の拡大と、繁盛期における駐車場、宿泊施設の不足といった問題を抱えている。
- ・さらに課題として、交通の問題。福岡から高千穂までは車で3時間近くかかり、またアクセスも十分ではない。
- ・新幹線開通も高千穂にとっては脅威であるため、アクセス方法のPRやレンタカーの実証実験を行うなど、他の地域と連携しつつ更なる情報発信を行っていく必要がある。

高千穂ほどの観光資源があれば観光客は黙っていてもやってくるのかと思いきや、やはり立ち止まっていたら観光客はすぐに他の場所に行ってしまう、常に考え続けなくてはいけないのだということを実感しました。

口蹄疫が宮崎で猛威をふるったのは記憶に新しいのですが、観光でどのような影響があったのかを聞いてきました。高千穂だけでみると被害はそうでも無かったそうですが、宮崎から来るというだけで他県から懸念されるなど、町民にとっては差別かと感じるほどの扱いを受けたそうです。

現在では鳥インフルエンザ、新燃岳の噴火と、心配なことばかりが続いていますが、被害が少しでも少ないこと、事態がはやく収束することを祈るばかりです。



朝日を背に、掛け声をあげての舞は勇壮かつ幻想的です。

●観光効果は地元商店街に波及しているのか

お話は天の岩戸神社の門前町にある、古民家を改装した「日向屋」で伺ったのですが、歩いていて気になったのが、観光客の多さに比べ、商店街にあまり人が流れていないという点でした。それを聞くと、観光地には人が集まってはいるが、商店街にそれが波及していないそうです。そこで、商店街に活気を取り戻すため、まず第一弾として、観光協会にインターンシップで来た学生さんの考えた、「まちなかギャラリー」を企画しているそうです。

「よかネット」でも何度か紹介しているように、購買人口が減少している商店街に観光客をどのように引き入れ、楽しんでもらうのかということはここ高千穂においても問題となっているようです。

●メインの夜神楽へ。眠気との戦いでした

高千穂の夜神楽は、集落の男性が神楽の演者となり、夕方5時から次の日の昼まで夜を徹して行われます。集落ごとに毎年くじ引きが行われ、くじに当たった家が神楽の会場を務めることが出来る。これは大変名誉なこととされていて、責任が大きい分、やりがいも大きいという。神楽は全33舞にも渡り、一つの舞で1時間近く踊り続けます。

神楽に加え、驚くのが集落で行われる接待です。本来ならば集落の人しか入ることが出来ない接待に、私達も加えてもらうことができたのですが、様々な人が民家に好き勝手に集まっては好き勝手に食べて、飲んでいました。部外者



最後の演目「雲下し」。盛り上がりは最高潮でした。

である私達も、丁寧な接待を受けさせて頂くことができましたが、皆さんの心遣いにはとても感動しました。

接待の場である民家から、神楽宿へ行き、神楽を観覧しました。寒空の下、舞う姿はとても美しく、また勇壮でもありました。観客の皆さんは準備万端、慣れている様子でした。かなりの人が地元の人のようです。神楽の時期は、特に若い人は同窓会感覚で帰省している人たちが多いそうです。

神楽宿には多くの人が集まっており、若い人もたくさん集まっていますが、夜の3時を過ぎてもその賑わいがやむことはありません。下調べの際に、夜中3時過ぎごろから観客を巻き込んだ神楽があるとか、神楽を見るならば「細女（うずめ）」の演目は観るべきだという情報を得ていたので頑張ろうと思ったのですが…寒さと眠気には堪えられず、夜中の3時すぎにタクシーでホテルに向かいました。

●観客を巻き込みつつ、興奮のフィナーレへ

次の日は神楽のフィナーレがあり、終盤になると、神楽の舞の中には観客が参加できるものも多くあり、一体感を味わうことができました。盛り上がっていく空気のなか、最後の演目である「雲下し（くもおろし）」にはいると、観衆からたくさんの歓声があがっていました。私達も見届けたという満足感でいっぱいでした。

今回伺った三田井集落は、集落の中でも比較的まちなかに近く、若者も多いということで、華やかで勢いのある神楽だった、という評判を聞きました。しかし、この神楽も、少子高齢化

のため年々規模が小さくなってきているといえます。今回の集落では、夜遅くまで人が集まり、賑わいをみせていましたが、ほかの集落では存続の危機に瀕しているところもあるようです。無理に保存しろというのも難しいですが、地元の人に根付いた伝統的な祭りだからこそ、地元の人たちの手で大事にしてほしいと思います。

今回は若くて華やかな神楽を観ましたが、もっと他の集落では田舎ならではの味のある神楽を観ることができるようです。機会があれば、眠気の来ない万全の状態で行ってみたいと考えています。（てらやま かおり）

近 況

❦ 雪の永平寺

永平寺は福井県の山奥にある。四国のお遍路と並んで憧れの修行の場だ。金沢を訪れる機会があったので、レンタカーで行こうと予約をしていると、「雪道を運転できるのか」「滑って動けなくなるぞ」「路頭に迷うぞ」などと周りから脅された。「なに、スタッドレスタイヤがあるさ」などと強がっていたが、この冬一番の寒波が到来というニュースを知って、こそっと観光バスで向かった。

バス利用者は年配の人たちがほとんどだった。最近パワースポットばかりなので、若い女性グループを期待したが、当てがはずれた。天気予報は大当たりで、窓の外は猛吹雪で白一色である。目印がないので、方向感覚がまった



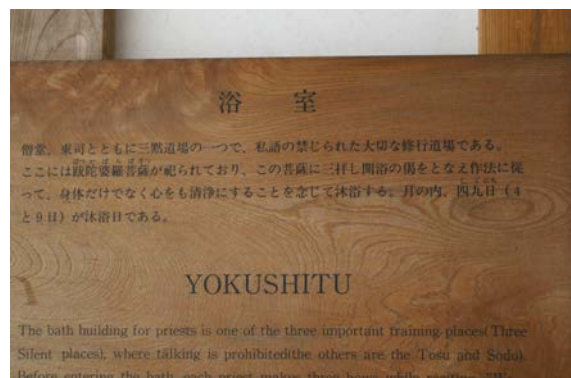
僧堂の外観と廊下。こんなところを突き飛ばされると思うとぞっとする。

く分からない。つくづく運転せずによかったと、所員の忠告に感謝した。

永平寺は、いわずと知れた曹洞宗の総本山である。一度、ここで座禅などの修行体験をしたいと思い、「食う・寝る・座る 永平寺修行記（新潮文庫）野々村 馨 著」を読んだことがある。30歳の著者（1990年頃）が出家して雲水として一年の修行生活を送った記録だが、入山すると何時間も座禅させられたり、食事の作法、袈裟行李の荷物の点検でミスがあるたびに、先輩の雲水から平手打ちが飛ぶ。階段の下に何度も突き飛ばす……などなど、想像を絶する話ばかり出てくる。

福岡で永平寺での修行体験をもつお坊さんと話をする機会があったので、事実かどうか確認すると、「まあそうですね」とあっけなく肯定された。しかも、「春の入山は、まだましですよ。秋に入山する人は少ないから、目立ってもっと大変ですよ」といっていた。

今と昔で少しは変わったりしていないのですかと聞いたら、「昔はカミソリが1枚刃だった



僧堂・東司（トイレ）・浴室が三黙道場なのが、いかにも永平寺らしい。

から、冬は寒くて頭を剃ったら血だらけになりました。今は3枚刃があるから便利ですよ」とのこと。伽藍を見て周りながら、そんなことを思い出した。施設案内をよく読むと、日帰りの参禅や一泊二日の参籠体験も行っているようだ。こちらは、それほど厳しくないらしい。ただ、朝3時半起きと書いてあった。もし、一緒に行きたいという人がおられましたら、ツアーを企画しますので、連絡をください。ただし、冬は寒すぎるので、暖かいときにしましょう。

（本田 正明）

● ノリシロ

● ノリシロ文化論

この本（倚りかからず 茨木のり子著 ちくま文庫）を読んでいて、ノリシロ文化論を思い出したので、以下つまらないことを書いてみる。

“君の仕事にはノリシロが無いじゃあないか”とよく怒鳴っていた。都市計画コンサルタントなどという、大仰な商売の事務所に入った、40年ぐらい前のことである。みんな若く、学校という世界でしか生きてきていない者がほとんどで、お互いの連携が不十分だった。「学校では自分の答案だけ書けばいいかもしれないが、社会へ出たらノリシロがいるんだ。やたらノリシロが多いのは能率が悪いが、ゼロでは繋がらないんだよ」といったりした。

このノリシロの加減を上手くやることを“ノリシロ文化論”と称していた。つまり、ノリシロというシロモノは、携わる者の心配り＝潜在的文化意識によって違ってくる。当然、民族、生活習慣、知的環境などで、幅の多少、安全性、

倚りかからず

茨木のり子著

ちくま文庫



許容度などが違わざるを得ない。

● 東北関東大震災のマスコミ

過不足のない、安全に配慮したノリシロを持ち続けることが、マネジメントの最大課題だ。なぜこんなことを言うかということ、東北関東大震災のテレビニュースの見過ぎからである。書くのもイヤになるが、「腹ふくるるわざなり」ということもあるので書くことにする。

根本的問題は、九州方面に来る途中で電波が

消えてしまうのか知れないが、我々が一番気にしていることには全く応えない。

先ず第一が、被害の人数だ。今日もこの震災での死者・行方不明者が、合わせて1万人になったといっている。また宮城県では「県内の死者行方不明者が1万人を超えている」といったと伝えている。このカウントは、①死者として確かめた人、②行方不明といって届け出があった人の数だけを問題にしている。

そして一方では、「南三陸町では人口18,000人の内10,000人の行方が分かっていない」と何度も伝えている。なぜこんなことが起こるのか。彼らには血が通っていないので、人間どもの消息には関心が無く、「誰かに言われたことを繰り返す。自分の見解を持ったり、考えたりはしない。後で責任が生じるようなことは絶対に言わない」という信念に燃えているとしか考えられない。私は、この①と②に入らない、一家全員が流されて、全滅したかも知れない人のことが一番気がかりだ。

●マネジメントの出来ない組織

二番目は指揮官の問題だ。「南三陸町の17,800人の人口の町で、町内の学校三カ所に避難している人は7,500人」というニュースを伝えている時に、日本の総理大臣だというお方が、たかだか小隊長ぐらいの役回りの“斥候”に、「ヘリコプターに乗ればテレビに出られる」とばかりに出かけた。もう一度、被災者が身を寄せている避難所に、見舞いに行きたいと言ったようだ。これはさすがに、現地は大変なので困ると言われて拒否されたらしい。

よく考えてみてほしい。東郷元帥が小さな船で斥候に行ったか。乃木将軍が、部下を2～3人連れて斥候に行ったか。彼らは大局を見て、全軍を指揮した。指揮が上手くないこともあったようだが、とにかく動かずに全局を見ていた。東郷元帥などは、艦橋で微動だにせず、ものも言わず立ちつくしていたという伝説が、世界中を駆けめぐったと言われているではないか。

見たことや、分かったことに、心配りするのは部下の仕事。見えていないことで、「必要欠くべからざること」が無いかに集中するのが指

揮官だ。見えていないことに意識を集中するのがマネージャーの仕事だ。リスクマネジメントの意識が無く、パフォーマンスだけに興味のあるような人は、いない。

こんなことは、中小企業の経営者には常識だ。リスクの伴うマネージャーの経験のない人間は首相とか、大臣などにはならない。

●リスクを負って戦う人への敬意

三番目は、原子炉の問題だ。テレビの解説者が学者か分からんが、「発表で“問題はない”と云われているのだから、それを信じれば問題はないことになる」といった。たしかリンゴだったと思うが、毛沢東は「リンゴの味は食べてみなければ分かん」といったのだったと思うが、この学者だけは、「私は一生リンゴを食べずにリンゴの批評をしていくつもりですが、食べた人がうまいと言っているのを、伝えているだけですから問題はないでしょう」というらしい。

私がこの間に、一番気にしていたことは、二番危険なところで、誰が何をしているかだった。しかしどのニュースにも、解説にも出てこない。

やっと3月17日の産経新聞に、ニューヨークタイムズの記事の引用で出てきた。そこに「最後の防御」と題して50人を特集しているそうだ。「彼らは迷宮のように機器が入り組み、停電で真っ暗になった施設内を、懐中電灯だけを頼りに、防護服とマスクに身を包んで這いずり回り、海水注入などの作業に当たっている」と賞賛しているそうだ。

私はネットに弱いので、すぐに見ることはしなかったが、改めてクリックしてみると、ネットには個人の書き込みで触れられている。米国メディアと日本の個人だけというのは悲しい。

気にしていると、もう一つ大前研一のブログで見つけた。私はブログからyoutubeにアクセスしたが、大前の2時間近くの解説は3月13日のモノであるにもかかわらず、あらゆる点で適切な評価、対策にふれている。

13日の大前の提案を採用していれば、17日現在のような、追いつめられて、より一層の危険を抱え込むようなことはなかったかも知れない。とにかく「決断が出来ないうえに、兵力の

逐次投入しかできない」昔の陸軍のDNAにこり固まった人たちが運営する国は、危険でならない。

●鶴のヒマラヤ越え

茨木のり子の詩を見ていて書き始めたので、その一部を引用する。

鶴が

ヒマラヤを越える

たった数日間だけの上昇気流を捉え

巻きあがり巻きあがりして

九千メートルに近い峨峨たるヒマラヤ山系を
越える

カウカウと鳴きかわしながら

どうやってリーダーを決めるのだろう

どうやって見事な隊列を組むのだろう

(以下略)

鶴たちは、みんなそれぞれが、臨機応変に幅を変えたり距離を変えるような、ノリシロを持っていて、お互いに調整しあっているのかも知れない。人間も昔はそのような心配りで、お互いをかばい合って、今のように広がってきたのかも知れない。さて今はどうなんだろう。

(蛇足) 自分の腹の調子を直すためのブログを書いています。「オチコボレ流 otikoboreryu」です。このような無駄口を載せています。(糸乗 貞喜)

総 よかネットキムチプロジェクト進行中！

はじめまして。平成22年11月16日より福岡県遠賀郡遠賀町の行う地域資源調査業務を行うため、よかネットで働いている福吉聡子です。

101号で参加者募集を行ったNPO法人グラウンドワーク福岡（以下GW福岡）主催「白菜収穫とキムチ作り体験ツアー（以下キムチ作りツアー）」に参加したので、当日の様子と、その後に社内で自然発生した「よかネットキムチプロジェクト」について御報告します。

●キムチ作りツアーに参加

GW福岡のキムチ作りツアーは当初1月16日に予定されていましたが、積雪のために延期となり、翌週23日に実施されました。まだ雪が残っている畑での収穫作業が難しいということだったのか、時間的に厳しいということだった



熱心にキムチの作りの手順を説明される講師の鄭さん（中央）

たのか、参加者の利便性を考慮したのか、よくわかりませんが、キムチ用白菜は関係者の手によって収穫され、会場に運び込まれていました。会場となったのは八女市上陽町の「ほたと石橋の館」の交流室。キムチ作りの指導をしてくれるのは釜山出身の鄭（ジョン）さんです。鄭さんは、弊社から歩いて数分の須崎町で韓国料理店「鄭家（ジョンガ）」を営んでいます。社員は度々、鄭家に通っているようですが、特に山田はキムチ作りツアーの講師になってもらうべく、交渉に通ったようです。

鄭さんからレシピを受け取り、手順の説明を受け、作業を開始しました。私はキムチ作りを初めて体験しましたが、どうやら20人ほどの他の参加者も同様の様子。言われるままに作業をすすめます。塩漬け作業を行い、漬かるのを待つ間に昼食を取り、その後ヤクニョンと呼ばれるキムチの素を作り、最後に白菜の葉一枚ずつにヤクニョンを塗りつけて、できあがり。

●事務所でキムチ作りの復習

なかなか面白かったので自分で復習をしようと思っていたところ、山田が「会社でキムチを漬けて、来たる5月7日のパーティーで出す」と言い出しました。

するとある日、遠賀町で進行する「れんげ・菜の花プロジェクト」の面々が、農家さんから特大の白菜を3株もらって来ました。彼らが菜の花畑で間引き作業をしている時に、お隣の畑で白菜の出荷作業をしていた方が、お近づきの印に下さったのだそうです。



葉を広げた白菜（左）とそのままの白菜（右）どちらもまだ干す前

貴重な白菜をもらってしまった以上、キムチ作りを始めないわけにはいきません。事務所が入っているビルの屋上で白菜を広げ、風にあてました。

●キムチづくりのポイントは、塩漬け

実は、鄭さんの指導によりキムチ作りをしていた時に、彼女がとても気にしていたのが「塩漬けに時間がかけられなかった」ことでした。どういうことかということ、日本の白菜は韓国のものに比べて水分が多く、塩漬けの前に1～2日間干したほうがいいのだそうです。味に深みも出るし、塩漬けの際の塩も減らせるし、歯ごたえのいいキムチができるし、といいことづくめ。塩漬けも時間をかけてゆっくり行おうとよいのだそうです。

そこで、今回は事務所ビル屋上のベランダで白菜を干し、その後、塩漬けにしました。塩は、事務所の近くの「キトラス」で買い求めた「平家の塩」なるものを使用しました。その甲斐あって、出来上がったものは、白菜の漬物としても充分味わえるおいしいものでした。なるほど、鄭さんがせっかちな塩漬けを苦にしていたはずだと合点がいました。

しかし、まだまだ作業は続行します。次は、ヤクニョン作りとその塗りつけ作業です。苦勞して切り刻んだ大量の大根・人参・ネギやすりおろしたニンニク・生姜・りんごと「博多せんしょう」で調達した韓国食材を目分量で混ぜ合わせヤクニョンを作りました。

なお、「博多せんしょう」の「横尾商店」ではキムチの素を「ヤンニョン」と呼んでいまし



どこからともなく汁気が出てきた、スープタイプのキムチ

たが、私たちの師である鄭さんがレシピに「ヤクニョン」と表記しているの、ここではヤクニョンとしています。

●究極のキムチの誕生？

休日出勤で仕事をしている社員もいる中、ニンニク・生姜・ねぎ・アミの塩づけ・いわしエキスといった材料の香気を会議室に充満させながらヤクニョンができあがりました。味見をすると「これだけで酒のアテになりますね！」という見事な味です。どのプロセスも手を抜いてはいません。出来上がるキムチが不味いはずはないのです。自信満々のキムチが出来上がりました。後は熟成するのを待つばかりです。

ところが、次の日になってみると「これはキムチ鍋なのか」というぐらい水分が出ています。ほとんど経験のないままに高まっていた自信が見事にしぼんでしまいました。そもそもこの水分をどう評価してよいのかもわかりません。いったいどこから出てきた水分なのかも不明です。

出て喜ぶべきなのか、出ないほうが望ましいのか。少なくとも、こういう状態のキムチはあまり目にしたことがありません。

実は今回のキムチ作りは5月7日のパーティーに向けた試験的なものでした。今後も数回の試行が見込まれています。数回の試行を通じて課題をどれぐらい見つけ、解決できるのか、まだまだ調査・研究・実験を続けなければならないようです。パーティーにいらっしゃったら、キムチを探してみてください。

このキムチ作りの一部をブログに掲載してい

ます。始めたばかりですが、続々内容を更新する予定です。よろしかったらご覧ください。

<http://ongameshiblog.yoka-yoka.jp/>

入力するのが面倒な方は「おんがめし」で検索してみてください。（福吉 聡子）

●鄭さんの評価は、まあ合格点

1週間後、鄭さんのお店に伺い、味見をしてもらいました。評価は、初めてにしては良くで

きているとのこと。ただし、唐辛子が足りないということと、水分が出たのは少し塩が足りなかったのではないかとということ。しかし、このキムチで作ってもらったチゲ鍋は適度な酸味があり、実に美味でした。

5月のよかネットパーティーでの手づくりキムチは、かなり期待できそうです。

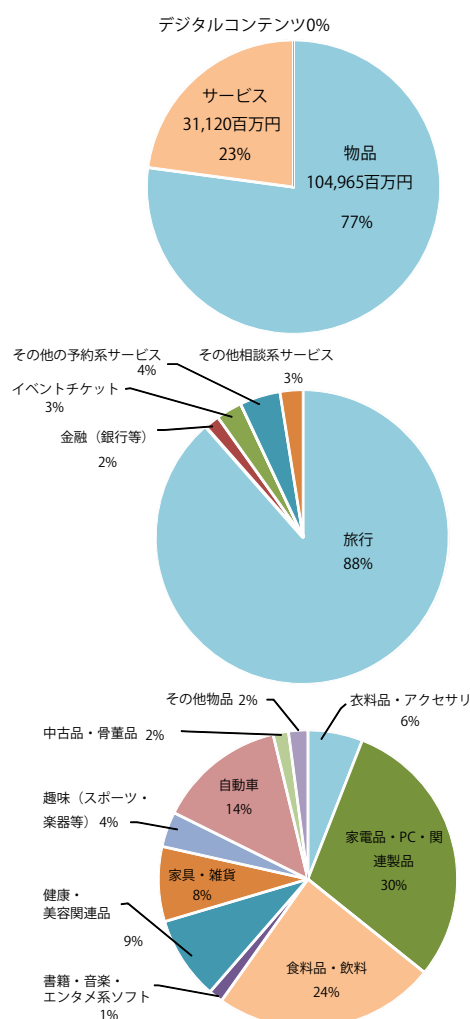
（山田 龍雄）

表紙解説（続き）

電子商取引売り上げのうち、サービス売り上げで最も多いのは旅行（62%）、金融（18%）となっています。物品では、衣料品・アクセサリ、家電品・PC等の高価な商品関係が43%を占めています。次に多いのが、食料品・飲料関係で、物品売り上げの13%、約2,000億円です。

九州の電子商取引事業者による売り上げ構成を見てみます。九州の売上額は136,089百万円、

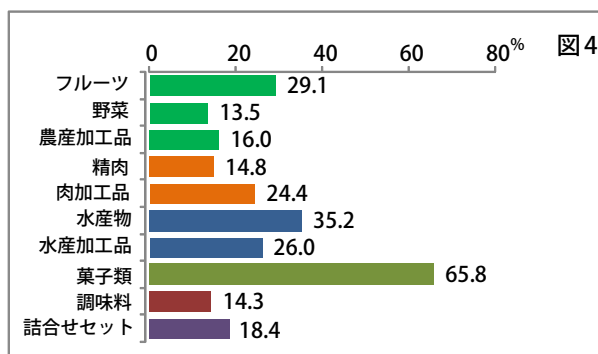
九州の電子商取引売り上げ構成 資料：表紙同じ



全国の4.3%程度です。九州の売り上げの23%を占めているサービスでは、約9割が旅行サービスの売り上げで、全国の旅行サービス売り上げの3%程度です。一方物品は77%を占めており、全国の物品売り上げの約7%を占めています。全国と比べて食料品・飲料の比率が高いことがわかります。これらの売り上げは立地している事業所におけるもので、関東の事業所数の全国比は33%に対して、売り上げは70%を占めており、事業所の集積度というよりも、参入した時期に大きく関わっているようです。

次図は、鹿児島県南大隅町でお手伝いをしている地域雇用実現事業の業務で実施されたインターネット調査結果です。食料品などのお取り寄せをネット通販で経験した人の比率は65%でした。その中で多いのは、菓子類65.8%、次に水産物（エビ・カニ含）35.2%、フルーツ、水産加工品となっています。中山間地域をはじめとして全国各地で取り組まれている農産加工品や調味料などのお取り寄せ比率は15%前後で、菓子類や水産関連品に比べるとまだ低いようです。（べ）

平成22年度鹿児島県南大隅町・地域雇用実現事業インターネット調査結果より



第19回 よかネットパーティーのご案内

これまでのパーティーでは、皆様の日頃の活動のお話（よかネタ）や、おすすめの一品（よか味）を持ち寄り、交流するパーティーを開催してきましたが、今回は趣向を変え、日頃お世話になった方々にお返しする意味で、これまで所員が各地域を回って美味しい、応援したい食べ物・飲み物を私たちが準備いたします（是非紹介したいというものがあれば、お持ち下さい）。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成23年5月7日（土）13:00～15:30

場所：警固神社境内 神徳殿

会費：1,000円

（お皿をお持ち帰りご希望の方は

別途1,000円お願いします）



『ふくつの鯛茶づけフェア』開催のお知らせ

平成21年度に策定をお手伝いしました「福津市観光基本計画」のアクションプランの1つとして、「ふくつの鯛茶づけフェア」を下記の期間で開催する予定です。

期間中は、市内の旅館・飲食店など約20軒において、玄界灘で獲れたマダイを使い、各店が工夫を凝らした「ふくつの鯛茶づけ」がメニューに並びますので、お楽しみに。

開催地 福津市内の旅館・飲食店の協賛約20軒

開催期間 平成23年5月14日（土）から6月12日（日）

注 期間中の天候によってはマダイが獲れない日もあり、提供できないこともあります。詳細は福津市、福津市観光協会などのホームページに4月20日以後掲載予定です。

編集後記

3月11日14:46頃、東北地方太平洋沖地震が発生しました。被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。そして1日も早い復興を、福岡から応援しています。（さ）

今回の東北地方の地震は、津波被害の影響もあり、復興するまでには多くの時間を要すると思われます。また原発の問題もあって、関東方面から九州へ一時帰郷する人達もたくさんおられるようです。しかし、被災地の避難場所などでの子どもたちをはじめ、住民の方々の思いやりのある行動を聞くと、復興に向けて、新たな地域コミュニティが誕生し、その推進力となるような、国などの支援策が必要ではないかと思っています。（べ）

よかネット No. 102 2011.4

（編集・発行）

（株）よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

（株）地域計画・名古屋